

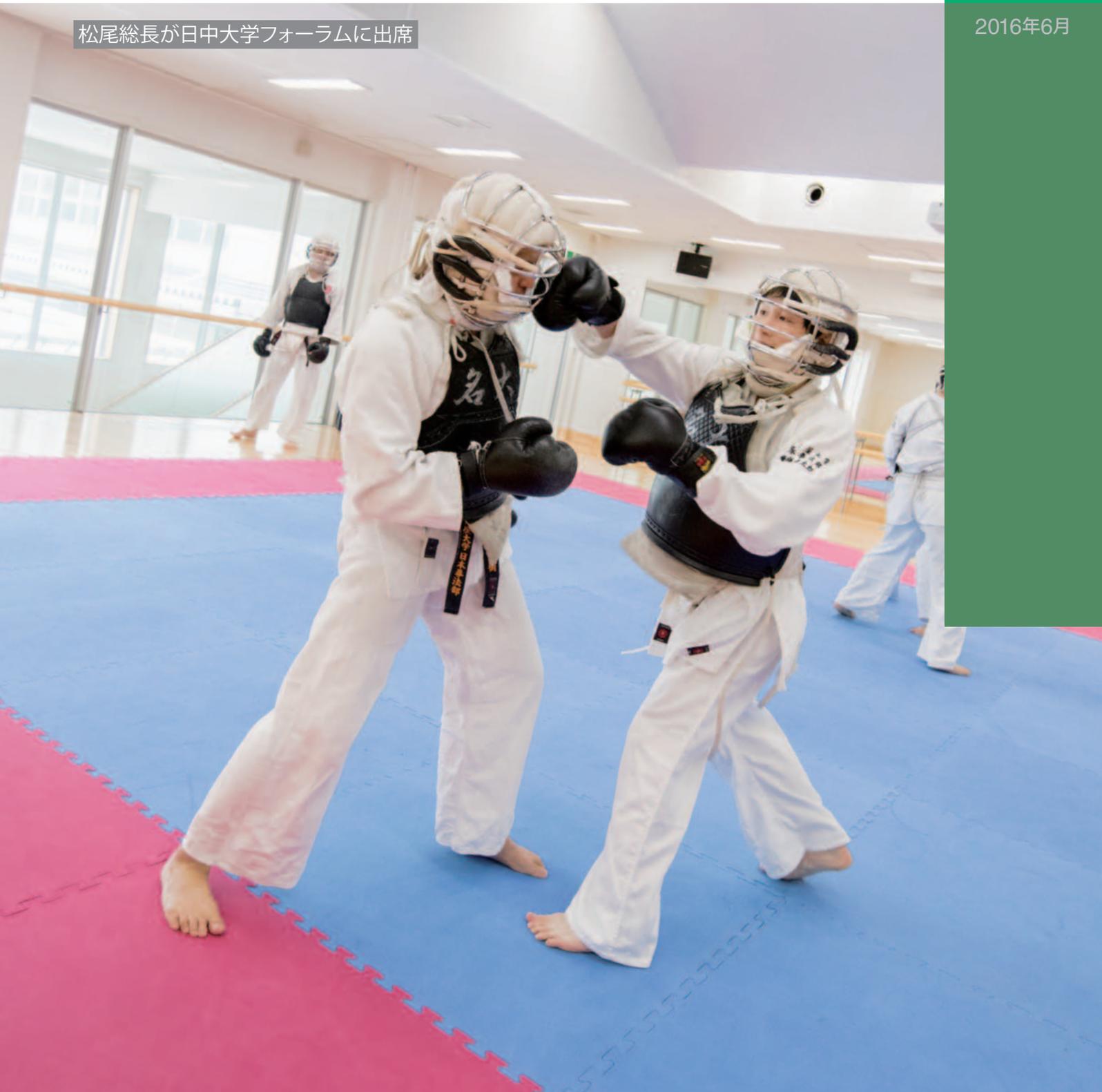
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.277

2016年6月

松尾総長が日中大学フォーラムに出席



目次

●ニュース

松尾総長が日中大学フォーラムに出席	3
名誉教授称号授与式・懇談会を開催	4
馳 浩文部科学大臣がベトナムサテライトキャンパス及び 日本法教育研究センター（ベトナム・ハノイ）を視察	5
第8回 AC21国際フォーラム2016を開催	6
平成28年度春季新入留学生歓迎懇談会を開催	6
全学同窓会関西支部第11回総会を開催	7
NHK スペシャルキャンパスコンサートを開催	7
下駄の鼻緒奨学金授与式を挙げる	8
ウズベキスタンサテライトキャンパス入学式を挙げる	8
パネル展「名大の歴史と現在」を開催	9
平成28年春の叙勲・褒章受章者が決まる	9

●知の先端

遺跡との対話が拓くヘレニズム文明研究の新展開	10
周藤 芳幸（大学院文学研究科教授）	

●知の未来へ

“支援者” から “医師” となるコンピュータ医療	12
小田 昌宏（大学院情報科学研究科助教）	

●部局ニュース

緊急報告会「平成28年熊本地震（速報）」を開催	13
日本法教育研究センターの学生が日本語スピーチコンテストで優勝	14
「プラズマ科学プラットフォーム」開所記念講演会・見学会を開催	14
合同建築・都市設計ワークショップを開催	15
ビッグデータをテーマに日仏討論会を開催	15
ICCAE 第1回オープンセミナーを開催	16
第119回防災アカデミーを開催	16
● 本学関係の新聞記事掲載一覧 平成28年4月16日～5月15日	17

● INFORMATION

平成28年度名古屋大学公開講座	19
-----------------	----

● イベントカレンダー

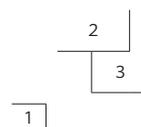
● 表紙サークル紹介	23
------------	----

● ちょっと名大史

名大の公文書史料 ― 過去に学び、未来への責任を果たす ―	24
-------------------------------	----

松尾総長が日中大学フォーラムに出席





- 1 出席者の記念撮影
- 2 本学の取り組みを発表する総長
- 3 基調講演を行う野依科学技術振興機構研究開発戦略センター長

松尾総長が、5月6日(金)、中国北京市の中国科学院学会堂で開催された日中大学フォーラムに出席しました。本フォーラムは、日本と中国の「大学交流」を目的に、2010年から日中間の学術交流最大のイベントの一つとして実施されています。

フォーラム開催に先立ち、前総長である濱口道成科学技術振興機構理事長及び丁 仲礼中国科学院副院長から主催者あいさつがあり、続いて、戸谷一夫文部科学省文部科学審議官等の来賓あいさつの後、本学の特別教授でもある野依良治科学技術振興機構研究開発戦略センター長から基調講演がありました。

今年度のフォーラムは、「世界最高レベルの大学を目指して～高等教育と研究開発の両立をめぐる～」をテーマとして、日中双方のトップクラスの23大学から学長等が参加し、世界最高レベルの大学を構築するための方策について、各大学におけるビジョンや取り組み等の紹介がありました。総長からは、「世界屈指の大学を目指す名古屋



屋大学の挑戦」と題し、本学の取り組み等について、「NU MIRAI 2020」を基軸とする世界標準の教育の提供、世界最先端の研究の推進、産学官連携の推進、国際化の推進、多様性を持ったキャンパスの創成、そして、日中間の一層の学術交流促進の重要性について発表がありました。各大学からの発表の後、総合司会を務めた伊藤宗太郎科学技術振興機構副理事から、総長がブ

レゼンで発言した「study with Asia, challenge to the World」の言葉を引用の上、日中の大学が、今後、益々連携・協力していくことの重要性について発言がありました。

日中双方の大学が抱えている課題等について、登壇者による意見交換が活発に行われた後、安藤慶明科学技術振興機構理事のあいさつにより閉会されました。

名誉教授称号授与式・懇談会を開催



記念撮影



名誉教授の称号授与

名誉教授称号授与式が、5月13日(金)、豊田講堂第1会議室において挙行されました。

名誉教授の称号は、本学教授として7年以上勤務し、教育上又は学術上特に功績のあった方等に授与するもので、今回新たに33名(新制計1,236名)の先生方に授与されました。

授与式では、出席された23名の新名誉教授に、松尾総長から辞令書が授与され、永年にわたり本学の教育・研究の発展に多大なる貢献をされたことへのお礼と、お祝いの言葉がありました。続いて、新名誉教授を代表して前総長の濱口道成名誉教授から謝辞がありました。

その後、シンポジオンホールにおいて、名誉教授懇談会が約90名の参加を得て開催されました。懇談会は、新名誉教授の紹介で始まり、昨秋からの叙勲等受章者、役員・部局長の紹介に続いて、総長からのあいさつとこの1年の本学の動き等について報告がありました。その後、名誉教授を代表して木下宗七名誉教授から近況報告及び大学への助言等があり、続いて、山本進一名誉教授の発声で乾杯が行われ、参加者は、終始和やかな雰囲気の中で懇談しました。

今回、新たに名誉教授の称号が授与されたのは、次の方々です。

国際機構	鹿島 央	大学院医学系研究科	石 樽 信 人	大学院工学研究科	松 田 仁 樹
情報連携統括本部	石 井 克 哉	大学院医学系研究科	小 島 勢 二	大学院工学研究科	山 田 克 彦
大学院文学研究科	稲 葉 伸 道	大学院医学系研究科	鈴 木 國 文	大学院工学研究科	吉 川 典 彦
大学院教育発達科学研究科	寺 田 盛 紀	大学院医学系研究科	平 井 眞 理	大学院国際言語文化研究科	鈴 木 繁 夫
大学院法学研究科	小 野 耕 二	大学院工学研究科	伊 藤 義 人	大学院環境学研究科	林 良 嗣
大学院法学研究科	千 葉 恵 美 子	大学院工学研究科	大 野 信 忠	大学院環境学研究科	古 本 宗 充
大学院法学研究科	森 際 康 友	大学院工学研究科	小 野 木 克 明	大学院情報科学研究科	大 西 昇
大学院経済学研究科	荒 山 裕 行	大学院工学研究科	金 武 直 幸	大学院情報科学研究科	小 澤 正 直
大学院理学研究科	上 羽 牧 夫	大学院工学研究科	鈴 置 保 雄	宇宙地球環境研究所	藤 井 良 一
大学院理学研究科	小 田 洋 一	大学院工学研究科	西 山 久 雄	宇宙地球環境研究所	中 村 俊 夫
大学院医学系研究科	濱 口 道 成	大学院工学研究科	早 川 義 一	農学国際教育協力 研究センター	前 多 敬 一 郎

(授与番号順、敬称略)

馳 浩文部科学大臣がベトナムサテライトキャンパス及び日本法教育研究センター（ベトナム・ハノイ）を視察



サテライトキャンパス、日本法教育研究センター学生等との集合写真

5月3日(火)、馳 浩文部科学大臣が、アジアサテライトキャンパス学院ベトナムサテライトキャンパス及び日本法教育研究センター（ベトナム・ハノイ）を視察しました。今回の視察は、馳大臣のベトナム・インド訪問の一環として実現したものです。両拠点は、本学の協定校であるハノイ法科大学内に設置されています。ベトナムサテライトキャンパスは、2014年に設置され、アジア諸国の各国政府等機関の幹部人材を対象とした「アジア諸国の国家中枢人材養成プログラム」のベトナムにおける教育拠点になっています。また、ハノイの日本法教育研究センターは2007年に設置され、ハノイ法科大学の学部生を対象に、4年間のカリキュラムで日本語による日本法を教育するプログラムを提供しています。

馳大臣一行は、最初に訪問したベトナムサテライトキャンパスで、プログラムの概要説明を受けるとともに、実際に学生がTV会議を用いて日本にいる法学研究科教員から指導を受けている様子を視察し、その後、サテライトキャンパスの学生等との懇談を行いました。

続いて日本法教育研究センターを視察しました。馳大臣は、以前から、日本法教育研究センターが行う日本語教育を「名古屋大学方式」*注と高く評価してきました。同センターでは、学生たちによる自己紹介や発表、馳大臣に対する質問がそれぞれ日本語で行われました。謙譲語と敬語の使い方が難しいとの学生からの質問に、以前に国語の教師であった馳大臣からは日本語教育の観点から専門的な回答がありました。最後に、馳大臣から学生たちに向けて、社会人となったら、社会の責任者として社会に貢献するようとのメッセージが贈られました。

その後に行われた、馳大臣とリー・ティエン・チョウ・ハノイ法科大学長との会談では、チョウ学長から、本学との協力関係はベトナムにとって、1999年から続く代表的なものであり、先日新しく就任した司法大臣は本学の元留学生であるなど、本学がベトナムの法曹人材の育成に大きく

貢献していることの紹介がありました。馳大臣からも、本学の活動を高く評価すると共に、育成された学生たちの今後の活躍への期待が述べられました。

最後に、日本法教育研究センターの学生より、学生が作製した色紙の贈呈や学生全員との記念撮影が行われました。

今回の視察には、文部科学省から山脇良雄国際統括官、井上睦子大臣官房国際課国際戦略企画室長等が同行し、本学からは、市橋理事、磯田アジアサテライトキャンパス学院長等が、現地での対応を行いました。また、今回、馳大臣の通訳を務めたブー・ティ・ホン・ミン氏は、法学研究科で博士学位を取得し、弁護士として活躍する傍ら、現在はベトナムにおける日本語通訳の第一人者としても活躍しており、ここでも本学の人材育成の成果が現れています。

視察の様子は馳大臣の公式 facebook に、「CALE（名古屋大学法政国際教育協力研究センター）の活動について、チャウ学長より絶賛していただき、感銘。名古屋大学サテライトキャンパス授業視察（アジア諸国の各国政府機関の幹部職員に博士学位取得を可能とする夢のようなプログラム）。また、日本語を学ぶ学生さんたちとも、20分ほど意見交換させていただき、感謝。」と掲載されるなど、今回の視察を通して、本学のベトナムにおける活動が改めて高く評価されたことがうかがえます。

*注：「月刊日本語」2011年11月号での中川正春文部科学大臣(当時)等との対談の中で、馳 浩衆議院議員(当時)から本学の日本法教育研究センターの教育方法を「名古屋大学方式」と紹介している。

第8回 AC21国際フォーラム2016を開催

第8回 AC21国際フォーラムが4月30日(土)から5月3日(火)までの4日間、ドイツのケムニッツ工科大学において開催されました。AC21創設以来のメンバーであるケムニッツ工科大学は、2009年の学生世界フォーラムに続き、AC21主要イベントの主催を務めるのは今回で二度目となります。今年は同校創立180周年に当たり、祝祭的雰囲気



AC21国際フォーラム参加者集合写真

の中で開催された同フォーラムは180周年記念行事のハイライトを飾りました。

11カ国19大学から成る AC21の内外から、企業・政府関係者を含む100名以上の参加者を迎えた同フォーラムは、テーマに「科学による社会変容を目指すイノベーション・ネットワーク」を掲げ、各セッションでは新たな産学連携の形や展望を探るべく、活発な論議が交わされました。本学の松尾総長、渡辺理事（AC21推進室室長）、財満副総長もパネリストとして登壇し、本学の産学連携に関する発表は好評を得ました。

例年通り、AC21運営委員会及び総会も4月30日と5月3日にそれぞれ開催され、新運営委員の承認に加え、2019年の国際スクーリング主催校としてケムニッツ工科大学、2020年の国際フォーラム主催校としてカセサート大学の承認・決定がなされました。またスペシャル・プロジェクト・ファンドの審査基準整備や、学生交換・職員研修構想の試験的開始等、生産的な提案や討議が展開されました。

創設14年を経た AC21は「研究」に特化した協働等、具体的な結実追及を見据え、今後も一層の連携強化と活動の充実化を図っていく予定です。

平成28年度春季新入留学生歓迎懇談会を開催

平成28年度春季新入留学生歓迎懇談会が、5月9日(月)、南部生協において開催されました。この懇談会の趣旨は今後の留学生在活が実りのあるものになるよう激励し、留学生同士のみならず、留学生関係教職員との懇談を通して一層の相互理解・交流を深めることを目的とし、当日は、新入留学生、教職員など約200名の参加がありました。

最初に松尾総長から歓迎、激励のあいさつがあり、これを受け、新入留学生を代表して、情報科学研究科の

Hetem Darweesh (エジプト)さんと、国際言語文化研究科の薛梅(中国)さんが、それぞれ日本での留学についての抱負等を述べました。続いて、渡辺理事の発声による乾杯の後、懇談にうつり、新入留学生が総長や教職員を囲んで、にこやかに歓談したり、記念撮影したりする姿が会場のあちらこちらで見られました。懇談会は、福田国際言語センター長の閉会のあいさつの後、大盛況のうちに終了となりました。



あいさつをする総長



参加教員と新入留学生

全学同窓会関西支部第11回総会を開催

名古屋大学全学同窓会関西支部第11回総会が、5月14日(土)、大阪市内の中央電気倶楽部において開催され、会員約250名が出席しました。

総会では、三洋化成工業株式会社名誉顧問である 箕 哲男全学同窓会関西支部長の開会あいさつで始まり、次いでノーベル物理学賞を受賞した天野 浩未来材料・シ



天野教授講演会の様子

ステム研究所教授の講演会が行われました。天野教授の講演は、会員の方にとって大変刺激的な興味深い内容であり、講演後には何人もの方が熱心に質問をされました。

その後、ピアニストの Arico 様より、「若き我等」など3曲のピアノ演奏があり、会場が落ち着いた雰囲気の心地よい空間となりました。

続いて、松尾総長から、「世界屈指の大学を目指して NU MIRAI 2020 - 名古屋大学の挑戦 -」と題した講演があり、引き続き、伊藤義人全学同窓会代表幹事から、全学同窓会の昨年度の活動・財政状況及び今年度の事業計画等について報告がありました。

また、今年度も天野教授の講演に併せて、ノーベル賞関連のパネル展示や本学オリジナル LED 関連グッズの販売、記念の集合写真の撮影を行い、参加者に大変喜ばれました。

総会・講演会後の懇親会には約100名が参加し、箕支部長より今回の総会をもって支部長を交代するとの報告と謝辞があり、その後、藤井眞澄新支部長が紹介されました。新旧両支部長からのあいさつのあとは、部局支部同窓会の代表者から近況報告があり、大変和やかなうちに終了しました。

NHK スペシャルキャンパスコンサートを開催

NHK スペシャルキャンパスコンサート (BS プレミアム「クラシック倶楽部」公開収録) が、4月28日(木)、豊田講堂において開催されました。平成26年度から、本学と愛知県立芸術大学によるキャンパスコンサートを年に2回程度開催してきましたが、このたび、NHK 名古屋放送局より、このキャンパスコンサートについて取材ならびに放送



ピアノ演奏をバックに高音の美声を披露する川島幸子愛知県立芸術大学准教授

をしたい旨依頼があり、開催する運びとなりました。

当日は雨天にもかかわらず、抽選で当選した約900名の来場者が豊田講堂を埋め尽くしました。愛知県立芸術大学の准教授ら5名の出演者によるクラシックコンサートは、「トロンボーンの温かな音色を」のコーナーから始まり、プライヤー作曲「愛の想い」で幕を開けました。大勢の観客は、ソプラノの独唱では、透き通るような高音の美声に惹きつけられ、ショパンの名曲「ノクターン」、「ワルツ」、「ポロネーズ 変イ長調『英雄』」では、ピアノソロの迫力に圧倒されました。また、ポピュラーなモーツァルト作曲「トルコ行進曲」は、ヴォロドス編曲版からの演奏で、聞き慣れたメロディーとは違う新たな魅力を再発見させられました。さらに、演奏の合間に司会者と演奏者のトークタイムがあり、通常のクラシックコンサートよりもアットホームな空気を醸し出していました。コンサートは予定していた時間を大幅に超えるほど、演奏者も観客も一体となって盛り上がり、アンコールでは出演者4名による曲目が披露され、会場は興奮に包まれた中、閉幕しました。コンサートの模様は本学の紹介などと合わせて、6月17日(金)にNHK・BS プレミアム「クラシック倶楽部」で放送されます。

下駄の鼻緒奨学金授与式を挙

名古屋大学下駄の鼻緒奨学金授与式が、4月13日(水)、豊田講堂第5会議室において挙行されました。

下駄の鼻緒奨学金は、名古屋大学学術憲章の基本理念及び寄附者の意向に基づき、本学の学部又は研究科に在学する人物で、成績が優秀でありながら経済的な理由により修学が困難な学生に対して、その学修・研究等の活動を奨励



下駄の鼻緒奨学金授与式

するために平成22年度に設立されたものです。

受賞者は奨学生4名(日本人学生3名、外国人留学生1名)で、授与式では奨学生採用通知書が授与されました。

奨学金選考委員長の木俣副総長から、「学生時代に下駄の鼻緒を切らし困っていた本奨学金の寄附者に、下駄の鼻緒を譲り渡した通りがかりの女性がかけた、『お礼は自分ではなく次に困っている人に返してください』との言葉の通り、寄附者の理念を引き継ぎ、社会に還元していく精神、奉仕の精神、互いに助け合う精神を忘れずに、学業や研究に一層励んでいただきたい」と祝辞があり、受賞者は改めて奨学生としての自覚を深めました。

授与式終了後に行われた木俣副総長及び奨学金選考委員会委員と奨学生との懇談会においては、終始なごやかな雰囲気の中で、勉学内容や研究内容、進路等について活発な意見交換が行われ有意義な会となりました。

ウズベキスタンサテライトキャンパス入学式を挙

ウズベキスタンサテライトキャンパス入学式が、4月27日(水)、タシケントのインターナショナルビジネスセンターにおいて挙行されました。

アジアサテライトキャンパス学院では、2014年から各国政府において将来の国のリーダーとして活躍が期待されている中堅又は若手の職員を対象に「アジア諸国の国家中核



式典後の集合写真

人材養成プログラム」を開始しました。現地サテライトキャンパスと本邦キャンパスの連携の下、現地教員による教育研究指導やICTを利用した遠隔教育、本邦での短期スクーリングにより、学生は長期に職場を離れることなく専門分野の知識と経験を深め博士の学位を取得することができます。現在カンボジアで8名、ベトナム1名、モンゴル1名、ラオス3名、フィリピン1名が在学中で、今回、長期に渡りウズベキスタンの法整備支援に関わる人材育成に協力をしている法学研究科に、ウズベキスタンとして第1号となる1名の新入生を迎えることになりました。

式典には、本学から市橋理事、磯田学院長、石井法学研究科長が出席しました。来賓としてウズマノフ・ボディル高等中等専門教育副大臣、加藤駐ウズベキスタン大使、アリエフ・マンノン大統領アカデミー学長他、保健省、タシケント法科大学、世界経済外交大学、サマルカンド国立大学、サマルカンド国立外国語大学、国際協力機構(JICA)、日本貿易振興機構(JETRO)、日本企業などの関係者が約60名出席し、ウズベキスタンサテライトキャンパスへの期待の大きさがうかがえました。

パネル展「名大の歴史と現在」を開催

大学文書資料室は、4月5日(火)から5月1日(日)までの間、中央図書館ビブリオサロンにおいて、パネル展「名大の歴史と現在－図表で見る沿革とキャンパスの145年－」を開催しました。

このパネル展は今年のホームカミングデイにおいて開催した企画展「地図・図面で見る名大キャンパスの歴史」にて展示した20枚のパネルを、本学の教職員や学生にも見てもらおうという趣旨で開催されました。とくに新入生向け

に、本学の沿革や現状を図表等で示すパネルを加えて再構成しました。

パネル化した20枚のキャンパスの地図・図面は、後世に作図されたものではなく、いずれも同時代に描かれたものです。本学やその前身学校の先人たちが、どのようにキャンパスの現状を認識し、あるいは将来像を思い描いていたのか、当時の雰囲気とともに実感できるようにしました。

本学の現在を示すパネルとしては、昨年7月に天皇皇后

両陛下が本学をご訪問になった際、松尾総長の説明をうけながらご覧になった3枚のパネルを展示しました。このパネルに、訪問の様子や過去の本学への行幸啓について紹介した『名大トピックス』の記事をパネル化して添え、行幸啓コーナーとしました。

地図や図面は、視覚的に楽しみながら歴史を学ぶことができる貴重な史料です。今後もこうした資料を展示する企画を行っていきます。



名古屋大学学園計画図(愛知県公文書館所蔵、昭和29年)



愛知県立病院及医学校之平面図(附属図書館医学部分館所蔵、明治13年頃)

平成28年春の叙勲・褒章受章者が決まる

－本学関係者7名が喜びの受章－

平成28年春の叙勲及び褒章の受章者が発表され、本学関係者では次の方々を受章されました。

瑞宝章は、国家又は公共に対して功労のある方のうち、公

務等に長年にわたり従事し、成績を挙げた方に授与されます。

紫綬褒章は、学術、芸術上の発明、改良、創作に関して事績の著しい方に授与されます。

【叙勲】

〔教育研究功労関係〕

瑞宝中綬章

赤松 宏 名誉教授(情報文化学部)

瑞宝中綬章

池邊 幸正 名誉教授(工学研究科)

瑞宝中綬章

長田 雅喜 名誉教授(情報文化学部)

瑞宝中綬章

中野 弘三 名誉教授(文学部)

【褒章】

紫綬褒章

篠原 久典 理学研究科教授

紫綬褒章

松岡 信 生物機能開発利用研究センター教授

〔文部行政事務功労関係〕

瑞宝中綬章

渡橋 正博 元事務局長

遺跡との対話が拓くヘレニズム文明研究の新展開

周藤 芳幸 大学院文学研究科教授

古代エジプト文明というと、まず思い浮かぶのは、沙漠に屹立する巨大なピラミッド、ツタンカーメン王の黄金のマスク、地中深くに掘り込まれた墓の壁を埋め尽くす謎めいたヒエログリフといったところでしょうか。これに対して、同じ古代文明といっても、古代ギリシア文明が想起させるのは、エーゲ海の眩い陽光、そのもとで生み出された白亜の神殿や人間味溢れる大理石の彫像、そして何よりも民主主義のような現代にもつながる政治思想などではないかと思えます。このようにまったく異なる伝統と相貌をもった二つの古代文明がダイナミックに交錯し、そこから活力に満ちた地中海の新たな文明が生み出されたのが、紀元前の最後の3世紀間、いわゆるヘレニズム時代のことでした。現在の私の中心的な研究課題は、エジプトにおける現地調査を踏まえて、この時代の歴史を描き直すことです。

学部、大学院で考古学を専攻し、二十代の後半

はギリシア政府給費留学生としてアテネでエーゲ海先史考古学を研究していた私がこのテーマに取り組むようになったのは、それほど古いことではありません。そのきっかけは、名古屋大学に着任して間もない1997年から再開されたエジプトのアコリス遺跡の発掘調査に、毎シーズン参加するようになったことでした。それでも、当初はそれが自分の将来の研究に大きく関わってこようとは、夢にも思いませんでした。というのも、アコリス遺跡は、地中海からナイル川を400kmも遡った中エジプトに位置しており、そこで何らかのヘレニズム文明の要素を見出すことができる可能性は、限りなく低いように見えたからです。ヘレニズム時代のエジプトは、プトレマイオス朝というギリシア系の王朝に支配されていましたが、その首都であるアレクサンドリアはエジプトの北端にあたる地中海岸にあり、そのエジプト内陸部への文化的な影響はきわめて限定的だったというのが、その頃の学界の通説でした。

ところが、実際に調査を始めてみると、その結果は意外なものでした。発掘区には、整形途中の石灰岩の石材が点在していたのですが、その埋土からはギリシアの遺跡でお馴染みのヘレニズム時代の土器やテラコッタ像が次々に出土したのです。なかでも、ロドスやクニドスなど、エーゲ海南東部で生産され、ヘレニズム時代の地中海世界に広く流通していたアンフォラ（ワイン交易用の大型土器）の破片が数多く出土したことは、この集落が建築用の石材の搬出やギリシア系のワインの輸入を通じて、地中海世界と密接に交流していた状況を示して



アコリス遺跡

いました。さらに、その発掘が一段落してから取り組むようになったのが、アコリス周辺の採石場の調査です。とりわけ、アコリスの南12kmほどの地点にあるニュー・メニア古代採石場には、ギリシア語とエジプト語との二言語で表記されたグラフィティ（作業の日付、担当者、掘削量を朱色の染料で岩の壁面に書いた記録）が膨大に残されており、そこからはプトレマイオス朝がもっとも繁栄していた紀元前3世紀の中頃から後半にかけて、この採石場でエジプト人とギリシア人が肩を並べて労働に従事していたこと、その労働の管理に使われる言語がエジプト語からギリシア語に変化していったことなど、様々な興味深い新事実が浮かび上がってきています。

ヘレニズム時代は、ギリシア語という共通語を介して地中海から西アジアにかけての世界が一つに結びついた、史上最古のグローバル化の時代で

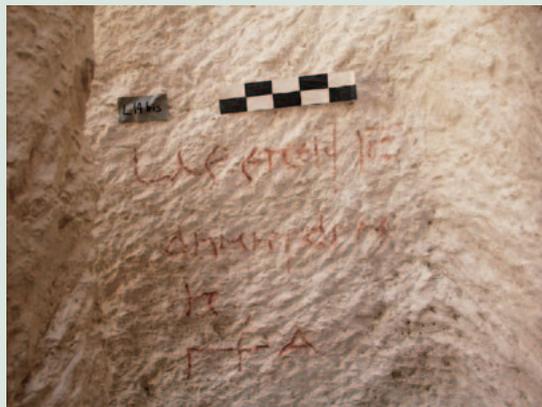


ニュー・メニア採石場

した。そして、遺跡との対話を通じてそこに生きた人々の暮らしに迫る営みは、私たちが生きる現代の社会について考える上でも、かけがえのない貴重な洞察を与えてくれるのです。



調査現場スナップ



ギリシア語グラフィティ

1962年生まれ、三浦半島の横須賀市で縄文時代の遺跡に囲まれて育つ。1984年、東京大学文学部卒業。1992年、同大学院人文科学研究科博士課程単位取得退学。博士（文学）。名古屋大学助教授を経て、2005年から現職。著書に、『ギリシアの考古学』（同成社、1997年）、『古代ギリシア 地中海への展開』（京都大学学術出版会、2006年）、『ナイル世界のヘレニズム エジプトとギリシアの遭遇』（名古屋大学出版会、2014年）などがある。休日は2人の子どもが活躍していた少年野球チームのコーチとして、ノックや試合の審判などに奔走。大人の試合では二打席連続ホームランを放って、監督に「職業を間違えましたね」と失笑されたこともある。

すとう よしゆき



小田 昌宏
大学院情報科学研究科助教

「支援者」から「医師」となるコンピュータ医療

医療分野では長きにわたって人体の構造・生命現象の解明が行われ、その結果が診断・治療へ活用されています。医療の発展に伴い、診断・治療の効果を向上させるための道具が求められることとなり、医学と工学の協力の下で様々な医療機器が開発されました。現在の医療機関では非常に多くの医療機器が使用されており、これらの機器無しでは患者の状態を調べることも困難です。医学と工学の連携が重要であることは広く認知されてきており、医工学という新たな分野が生まれました。

これまでの医学・工学連携での開発は、医療に役立つ“道具”を作るという側面があります。この医工連携に情報学が新たに加わり、単なる道具ではなく知能を持った道具、さらには診断・治療を行う医師を支援する“支援者”を作り出すことを目指し、研究が行われてきました。そのような研究の一つとして、私たちは医用画像処理を通してコンピュータによる診断・治療支援技術の研究開発を行っています。医療現場で撮影される内視鏡画像・超音波画像・CT画像などの様々な医用画像を用い、私たちが開発した技術により患者の状態・病変位置・病気の進行度などの情報をコンピュータを用いた知的処理で抽出し、医師に役立つ形へと変換して情報提示を行います（図1、2）。

コンピュータによる診断・治療支援は医療現場での利用が始まっていますが、患者の状態に関する判断や治療行為などの判断・行為を行うのはあくまでも医師であり、コンピュータが行うことはできません。これまではコンピュータによる判断の正確性に疑問が持たれていたため、コンピュータは診断・治療の支援のみに使われています。これに対し、近年の画像撮影装置や画像処理技術の向上により、医用画像のコンピュータ処理による診断の精度が向上しています。一部の病変についてはコンピュータが医師に匹敵する検出性能、つまり判断力を示しています。また、治療では手術ロボットなどの開発が進んでおり、コンピュータが治療を支援するだけでなく、治療行為を行うことが可能となっています。今後、コンピュータが“支援者”として支援するのみでなく、“医師”として診断・治療の判断・行為を行う未来が訪れると考え、私はコンピュータ医療の研究を進めています。

コンピュータ医療を実現することで、大規模データベースに基づく医療判断、地域による医療格差軽減などの医療の均てん化、迅速な医療サービスの提供などが可能となります。一方、問題発生時の責任の所在をどのように定めるかなどの解決すべき課題もあります。

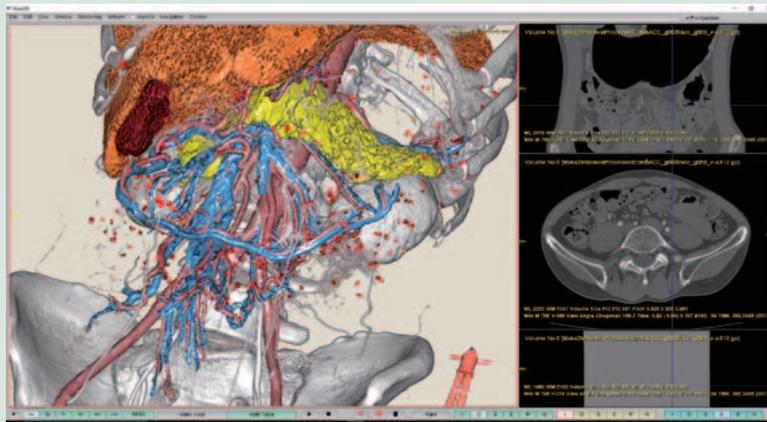


図1 CT画像から自動検出されたリンパ節候補領域。赤色の小さな点が検出結果で、がん転移経路となる可能性のあるリンパ節の位置を立体的に示しています。

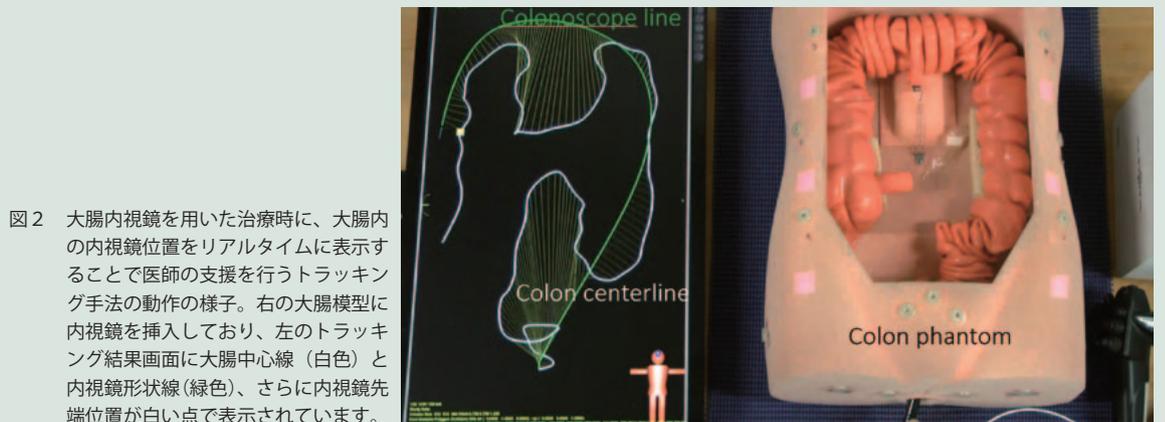


図2 大腸内視鏡を用いた治療時に、大腸内の内視鏡位置をリアルタイムに表示することで医師の支援を行うトラッキング手法の動作の様子。右の大腸模型に内視鏡を挿入しており、左のトラッキング結果画面に大腸中心線（白色）と内視鏡形状線（緑色）、さらに内視鏡先端位置が白い点で表示されています。

緊急報告会「平成28年熊本地震（速報）」を開催

●減災連携研究センター



減災連携研究センター緊急報告会の様子

減災連携研究センターは、4月20日（水）、減災館において4月14日（木）に起こった平成28年熊本地震の緊急報告会を開催しました。自治体や民間企業、報道、一般市民、大学関係者、学生を含め、約280名の参加がありました。

報告会では、冒頭に福和センター長より、阪神・淡路大震災との揺れの違いや被害の違い、この地震から導かれる家屋の耐震化等の課題について報告がありました。次に、1889年の明治熊本地震との比較において、西澤泰彦環境学研究科教授より明治熊本地震の被害調査について、武村雅之寄附研究部門教授より1889年明治熊本地震と今回の地震（速報）について、当時の被害調査から推定される震度分布、震源、今回の地震との関連性等について報告がありました。続いて、鷲谷 威減災連携研究センター教授より、本地震の概要と地学的特性、山中佳子環境学研究科准教授より、地震観測記録やGNSS等から推定された震源特性や地震活動、今後の地震・火山活動等について報告がありました。さらに、野田副センター長より、南阿蘇の土砂崩壊と土質特性及び河川・堤防・ため池の被害が報告されました。次に、護 雅史減災連携研究センター特任

教授、平山修久減災連携研究センター准教授、阪本真由美減災連携研究センター特任准教授より、現地緊急調査報告として、全体概要、建物被害調査結果、上下水道の被害・復旧状況、震災廃棄物の問題、避難所の状況・課題等について報告がありました。さらに、倉田和己寄附研究部門助教より、スマートフォンアプリも活用した災害情報集約WebGISの仕組みと本地震での活用事例、今後の展開について報告がありました。最後に、上園智美受託研究員より、近々の被害調査報告について、熊本市内、益城町を中心に報告がありました。以上のように、様々な専門家からの報告が行われ、それぞれの報告に関して、フロアから活発な質疑応答が交わされました。



報告する福和センター長



報告する武村教授

日本法教育研究センターの学生が日本語スピーチコンテストで優勝

●大学院法学研究科・法政国際教育協力研究センター

法学研究科・法政国際教育協力研究センターが行っている、アジア諸国における法整備支援の中心である、日本法教育研究センターの学生らが、各国のスピーチコンテストで優勝しました。

4月24(日)にベトナム・ハノイで行われた、国際交流基金主催「日本語フェスティバル2016」で、2年生のグエン・



センターからの出場者と応援者

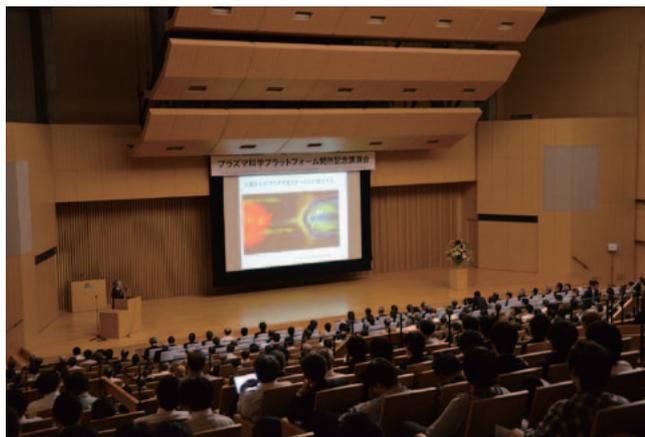
ティ・フォン・ザンさんが優勝し、3年連続でセンターの学生が優勝するという快挙を成し遂げました。「いじめに負けない」という彼女のスピーチは、自分の経験をもとに、いじめを乗り越える鍵は、恐怖心を乗り越えて人間関係の扉を開く自分自身の力にあるという力強いものでした。他にも2年生のホー・タイン・トゥイさん、グエン・ミー・リンさん、3年生のグエン・ティ・ビック・ヴァンさんが各賞を受賞し、訪日研修の機会を得るなど、センターの学生の優秀さが高く評価されました。

また、5月8日(日)に行われた在カンボジア日本国大使館とカンボジア日本人材開発センターとの共催による、「第19回カンボジア・日本語スピーチコンテスト」では、3年生のクム・カエマリーさんが渡日経験有の部門で優勝、2年生のセイン・ソティダーさんが渡日経験無の部門で3位となりました。「ごめんなさい、日本」というカエマリーさんのスピーチは、2つの世界大戦を通して日本に対して抱いていた悪いイメージを、「今の日本はどうか。勉強してみて、その答えを自分で探してみなさい」という父親の言葉に後押しされ、学びや交流を通して変化させたこと、自分自身で経験することの大切さを熱く語りました。

「プラズマ科学プラットフォーム」開所記念講演会・見学会を開催

●大学院工学研究科

プラズマ医療科学国際イノベーションセンターと工学研究科附属プラズマナノ工学研究センターは、4月26日(火)、豊田講堂及びナショナルイノベーションコンプレックス(NIC)において、名古屋大学「プラズマ科学プラットフォーム」開所記念講演会・見学会を開催しました。この行事は、両センターを平成27年10月にNIC 4階に移



約950名を迎えた会場の様子

設し、グローバル共同利用施設「プラズマ科学プラットフォーム」として活動を本格化させたことを記念して開催されたもので、学内外から約950名が出席しました。

記念講演会では、松尾総長のあいさつに続いて、大野工学研究科附属プラズマナノ工学研究センター長のプラズマ科学プラットフォーム紹介、小森彰夫自然科学研究機構長の基調講演、板倉周一郎文部科学省大臣官房審議官の来賓あいさつ、吉川医学系研究科副研究科長、三田野好伸東京エレクトロン執行役員、小林英行東芝メモリ事業部長附、菊田志向富士通執行役員の講演、新美工学研究科長のあいさつが行われました。いずれも、今後の日本や世界のモノづくりの動向を見据えた示唆に富む内容で、参加者は熱心に耳を傾けていました。

また、同時に豊田講堂で行われた展示会では、科研費新学術領域「プラズマ医療科学の創成」、工学研究科研究室、未来社会創造機構部門などによるポスター発表や大気圧プラズマを用いた科学技術の実演が行われ、多くの方々がプラズマの魅力を満喫していました。

その後、NIC 4階に移動し施設見学会を行い、大盛況のうちに記念行事を終了しました。

合同建築・都市設計ワークショップを開催

●大学院環境学研究所

大学院環境学研究所都市環境学専攻建築学コースでは、4月25日(月)から29日(金)までの5日間、環境総合館において、フランスのパリ・ヴァル・ドゥ・セヌ国立高等建築学校(ENSA-PVS)と中国の天津大学建築学院と合同で、建築・都市設計ワークショップを開催しました。このワークショップは本学の建築学コースと ENSA-PVS 及び天津



成果発表会での意見交換

大学の修士課程相当の学生を対象に、異なる文化的背景を持った学生同士が英語を共通言語にして一つの建築・都市デザインの提案をまとめる機会として2009年から開催しており、今回は14回目になります。また、ENSA-PVSとは2009年度に、天津大学とは2015年度に締結した学術交流協定に基づいて実施しています。今回は都市計画や建築を専攻する大学院生が ENSA-PVS から15名、天津大学から14名、建築学コースから18名の計47名が参加しました。

ワークショップの内容は、名古屋の都心の特徴付ける久屋大通と新堀川という2つの都市軸の接点となる敷地を対象に、3大学の学生が7つの混成グループに分かれて公共空間や商業・居住空間の整備に向けた建築・都市デザイン提案を検討し、その成果をA1版4～5枚の図面と模型で発表するものです。最終日の成果発表会で発表された提案内容は、どれも今後の名古屋都心の建築・都市デザインの参考になるものであり、本学の教員や大学院生、学部学生だけではなく、名古屋の建築・都市デザイン関係者も来場し、学生提案へのコメントとともに来場者間での意見交換が活発に行われました。

ビッグデータをテーマに日仏討論会を開催

●大学院情報科学研究科

日仏討論会「ビッグデータ 科学が約束する日常の革命とは？」が、4月13日(水)、理学南館大講堂において開催されました。これは、在日本フランス大使館主催、情報科学研究科、博士課程教育リーディングプログラム実世界データ循環学リーダー人材養成プログラム他の共催で開催されたものです。



討論するパネリスト

講演会には松尾総長、渡辺理事、松下理事及びフランスからティエリー・ダナ駐日大使にも出席いただき、本学の教職員・学生だけでなく、愛知県内の大学、企業等から約130名の参加がありました。

はじめに、総長及びダナ大使より開会のあいさつがあり、株式会社中日新聞社電子メディア局の伊藤嘉英管理局長の司会のもと、マップアール・テクノロジーズ株式会社マチュー・デュムラン氏、ケベック大学セバステアン・ガンブス教授、中央大学総合政策学部宮下 紘准教授、インテル株式会社野辺継男氏、名古屋市総務局難波伸治課長及び武田一哉情報科学研究科教授の6名が膨大なデータの蓄積が活用される「ビッグデータ」の可能性について、それぞれ専門の見地からプレゼンテーションを行いました。

討論会ではビッグデータが社会に大きなインパクトを与える現代の技術とされ、公共交通網の整備にも役立つなどの応用例も紹介されましたが、一方で、個人情報保護の観点からビッグデータの利活用を推進するための対策が喫緊の課題であるとの意見が出されるなど、ビッグデータを取り巻く現状と課題について活発な議論が行われました。

ICCAE 第1回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター（ICCAE）は、4月18日（月）、農学部第3講義室において、2016年度第1回オープンセミナーを開催しました。今回は、ペルー共和国のラ・モリーナ農業大学より招いたルイス・イコチア・サラス水産学部教授の講演が行われました。イコチア・サラス教授は、「エルニーニョ・南方振動と農水産業への影響」と題



ルイス・イコチア・サラス教授の講演の様子

した講演の中で、エルニーニョがどのように発生し、海洋及び大気の状態に影響を及ぼすのかを解説するとともに、エルニーニョの発達により、海洋生物の移動、分布が大きく変化することについて、研究例をあげて紹介しました。また、エルニーニョが様々な作物の生産と関連産業に大きな影響を及ぼしていることを示し、経済活動の損失、あるいは生命の危機といった世界各地での自然災害を軽減するために、エルニーニョの予測が益々重要になっていることを指摘しました。本オープンセミナーを通じて、エルニーニョ現象に関わる指標生物の群集動態や、より信頼性の高い予測に向けた課題などについて、学内外の参加者とともに最新の情報を共有することができました。

第119回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、4月28日（木）、減災館1階減災ホールにおいて、第119回防災アカデミーを開催しました。今回は、株式会社日建設計執行役員エンジニアリング部門構造設計グループ副代表の鳥井信吾氏による「日本の運命を握る超高層建築の現状と未来」と題する講演が行われ、約100名の参加がありました。鳥井氏は多くの超高層



講演する鳥井氏

ビルの設計を手掛けてこられたその道の第一人者です。

講演では、最近国土交通省から発表された超高層建物の検討用地震動案に触れ、地域によっては従来の法律のレベルに対して2倍の大きさがあることを指摘、それに対して設計者はどう対処すべきかについて話されました。さらに、自然に対してはあくまで謙虚にとのことで、名古屋の超高層ビルや東京スカイツリーなどで行われている様々な耐震設計上の工夫をわかり易く説明されました。鳥井氏の誠実な人柄を感じさせる熱弁に参加者一同が聴き入りました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
1 鷺谷 威減災連携研究センター教授は熊本地震について「地震活動が飛び火して急激に拡大していく事態は、日本中の専門家にとっても未経験だ」と語る	4.16 (土) 4.17 (日)	中日 (夕刊) 読売
2 鈴木康弘減災連携研究センター教授は熊本地震と火山の関連について「地震と違い、火山はマグマが上昇するなど何らかの前兆がある。観測データを見比べながら注意していくべきだ」と語る	4.16 (土)	読売 中日 (夕刊)
3 福和伸夫減災連携研究センター教授は熊本市のマンションが2つの棟を結ぶ渡り廊下を分断するように亀裂が入ったことについて「建物が真上から見てL字型の場合、二つの建物を構造的に分離する隙間をつくる。今回は、隙間のおかげで建物に大きなダメージが無かった可能性がある」と語る	4.16 (土)	中日 (朝刊)
4 山岡耕春環境学研究科教授は熊本地震の長周期揺れについて「M6級なら比較的強く出る」と語る	4.16 (土)	中日 (朝刊)
5 天才たるゆえん アユコ24歳 ⑤リオへ 無から狙う 最高の舞台 日本郵政グループ鈴木亜由子氏本学卒業生	4.16 (土)	中日 (朝刊)
6 紙つぶて：全体像を理解すること 四方義啓本学名誉教授	4.16 (土)	中日 (夕刊)
7 鈴木康弘減災連携研究センター教授は熊本地震を起こした日奈久断層帯と布田川断層帯について「二つの断層はつながっていて、14日と16日の地震は、一連の活動で起きた」と語る	4.17 (日)	読売
8 本学と東京大学、豊田市、足助病院が連携し、高齢者の見守り支援や移動手段を確保するためのタブレット端末や人感センサーを使った実証実験が始まって2か月が過ぎ、課題が見えてきた	4.18 (月)	中日 (朝刊)
9 山岡耕春環境学研究科教授は熊本地震について「南海トラフ地震の誘発は考えにくい」と語る	4.18 (月)	日経 (朝刊) 読売
10 市民公開講座「進歩する肺がん治療」開催：17日 長谷川好規医学系研究科教授が「肺がんは、1年間にかかる患者数では3番目だが死亡数では最も多い」と説明	4.18 (月)	中日 (朝刊)
11 黒田達朗環境学研究科教授は熊本地震で工場の稼働停止など対応する企業があることについて「東日本大震災以降、メーカーは調達先を分散する努力を続けているものの、熊本地震には間に合わなかった」との見方を示した	4.19 (火)	中日 (朝刊)
12 ものづくりを支える名古屋～イノベーション 人と技術が融合するまち～開催：17日 丹羽宇一郎本学名誉博士が講演	4.19 (火)	中部経済
13 鈴木康弘減災連携研究センター教授は広島大学とともに熊本地震の現地調査を行い「布田川断層」が阿蘇山のカルデラ内にあるのを南阿蘇村で確認	4.20 (水)	毎日 (朝刊)
14 編集委員が迫る：地震研究 使命と限界 山岡耕春環境学研究科教授	4.20 (水)	読売
15 時のおもり：核兵器保有可能発言「自衛のため」戦力拡大	4.20 (水)	中日 (朝刊)
16 馬場嘉信工学研究科教授と長谷川好規医学系研究科教授と愛知県は細胞から肺がんの原因となる異常なタンパク質を短時間で検出し、抗がん剤の効果の有無を素早く判断して、適切な治療につながる検査装置を開発した	4.21 (木)	読売
17 本学はプラズマ科学の研究開発拠点「プラズマ科学プラットフォーム」を稼働、プラズマ技術を用いた研究開発を本格化する	4.21 (木)	日刊工業
18 減災連携研究センター「緊急報告会 平成28年熊本地震 (速報)」開催：20日 福和伸夫減災連携研究センター教授が講演	4.21 (木)	毎日 (朝刊)
19 数時間前と光景一変 予期せぬ「本震」記者も経験 鷺谷 威減災連携研究センター教授は「地震の連鎖が起きている中、今後も断層帯のどこかで強い揺れが生じる可能性はある」と語る	4.21 (木)	中日 (朝刊)
20 教育@とうかい：名大生ら「KagaQ」科学の面白さ伝える 門脇誠二博物館講師は「参加した人たちに楽しい気持ちを持ってもらうことが大事」と語り、梅村綾子学術研究・産学官連携推進本部研究員は「小中学生にとって大学生は身近で親しみやすく、内容も伝わりやすかったのでは」と語り、海老原哲男さん大学院理学研究科生は「いろいろな切り口で科学を身近に感じてもらいたい」と語る	4.21 (木)	読売
21 本学法学部生が一宮市で5月1日に法律相談を行う	4.21 (木)	毎日 (朝刊)
22 中嶋哲彦教育発達科学研究科教授は全国学力テストの前に過去問を解かせていた地域があったことについて「学校別の成績も公表される現状では『競争しなさい』と言われていて受け止めるのが普通だ」と語る	4.21 (木)	毎日 (夕刊)
23 天野 浩未来材料・システム研究所教授が丸川珠代環境相を表敬訪問	4.22 (金)	日刊工業
24 減災連携研究センター「緊急報告会平成28年熊本地震 (速報)」開催：20日 福和伸夫減災連携研究センター教授は「阪神大震災の教訓が生かされているのか。これから検証しないといけない」と語り、鷺谷 威同教授は「日奈久断層帯の南側の一部でまだ破壊されていない部分が残っている」と語る	4.22 (金)	中日 (朝刊)
25 熊本の地震について鷺谷 威減災連携研究センター教授は「南西側でも規模の大きな地震への警戒が必要だ」と話し、山岡耕春環境学研究科教授は「地震が順調に収束していくとは限らない」と語る	4.22 (金)	読売
26 朝日カルチャーセンター新講座：「ニュートリノとニュートリノ振動」中村光廣未来材料・システム研究所教授、「美と芸術の哲学ーカント、ヘーゲルの美学」宮原 勇文学研究科教授	4.22 (金)	朝日 (朝刊)
27 熊本地震想定外の被害拡大 福和伸夫減災連携研究センター教授は「震度7が2回は厳しい」と語り、鷺谷 威同教授は隣り合う断層が誘発されたことについて「活断層のどれか1つで地震が起きたとき、周りは明らかに確率が上がる」と語る	4.23 (土)	中日 (朝刊)
28 「プラズマ科学プラットフォーム」開所記念講演会・見学会開催：26日 大野哲靖工学研究科教授が概要を紹介	4.23 (土) 5. 1 (日)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
29 紙つぶて：日本の筆記具 四方義啓本学名誉教授	4.23 (土)	中日 (夕刊)
30 伊勢志摩サミット開催記念《中部の輝く女性》サミット開催：23日 東村副理事・生命農学研究科教授が基調講演	4.24 (日)	中日 (朝刊)
31 活断層 知って備えを 護 雅史減災連携研究センター特任教授は「いまは地盤の揺れやすさなども調べられる。命や財産を守る備えを進めることが大切だ」と語る	4.25 (月)	朝日 (夕刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成28年4月16日～5月15日]

記事	月日	新聞等名
32 阪本真由美減災連携研究センター特任准教授が熊本の被災地に入り支援を始め「今は役場の職員が頑張っているが、地域の人にどう運営を委ねるかが今後の課題」と語る	4.25 (月)	朝日 (朝刊)
33 文部科学省が2020年度以降の次期学生指導要領でプログラミング教育を小中学校に取り入れることに伴い、本学に情報学部が新設されることが取り上げられる	4.26 (火)	毎日 (朝刊)
34 福和伸夫減災連携研究センター教授は「今の耐震基準は『建物は損傷はしても命は守る』という考え方で、損傷後の状態は考慮されていない」と語る	4.26 (火)	毎日 (夕刊)
35 迫真: AI 大競争 感性を持たせたい 佐藤理史工学研究科教授が進める人工知能で小説を自動生成する研究が取り上げられる	4.27 (水)	日経 (朝刊)
36 2016年春の褒章: 紫綬褒章 篠原久典理学研究科教授、松岡 信生物機能開発利用研究センター教授	4.28 (木)	中日 (朝刊) 他5社
37 パリ協定 脱炭素カギ 高村ゆかり環境学研究科教授がシンポジウム「パリ協定後の世界と日本」で京都議定書との違いや特徴を解説	4.28 (木)	朝日 (朝刊)
38 山岡耕春環境学研究科教授は熊本地震について「余震活動は規模も小さくなり、だいぶ収まってきている」と語る	4.28 (木)	読売
39 世界最強のモノづくり先進地域へ 産学官 GaN 共同研究を引っばる天野 浩未来材料・システム研究所教授	4.28 (木)	日刊工業
40 科学技術振興機構は日本の研究開発の活性化を目指す JST の改革計画「濱口プラン」を発表し、科学技術振興機構理事長濱口道成元総長は「常に時代の最先端に行くチームを日本の中で構成したい」と語る	4.28 (木)	日刊工業
41 國枝理事はエックス線天文衛星「ひとみ」の運用断念について「いいデータが取れる所まで行きながら残念」と語り、松本浩典現象解析研究センター准教授は「若い学生たちといい仕事をしたいと思っていた」と語る	4.29 (金)	中日 (朝刊)
42 春の叙勲 瑞宝中綬章: 赤松 宏名誉教授、池邊幸正名誉教授、長田雅喜名誉教授、渡橋正博元事務局長、中野弘三名誉教授	4.29 (金)	中日 (朝刊)
43 わが友わが学び舎: 経済学部経済学研究科同窓会 キタン会	4.29 (金)	中部経済
44 紙つぶて: 小工場としての生き物 四方義啓本学名誉教授	4.30 (土)	中日 (夕刊)
45 ひもとく: 改憲問題 愛敬浩二法学研究科教授「押しつけ」で困るのは誰か?	5. 1 (日)	朝日 (朝刊)
46 「中部経済学インターゼミ」開催: 12月3日 本学のゼミも参加予定で柳原光芳経済学研究科教授は「自分たちが社会をつくるという意識を持つ場にしてほしい」と語る	5. 1 (日)	中日 (朝刊)
47 病院の実力: 補聴器 本学の治療実績が取り上げられる	5. 1 (日)	読売
48 文部科学省シンポジウム「省エネルギー社会の実現に資する次世代半導体研究開発—青からパワーへ 未来への挑戦」開催: 18日 天野 浩未来材料・システム研究所教授が講演	5. 2 (月)	日刊工業
49 鈴木康弘減災連携研究センター教授は熊本地震の震源の日奈久断層帯と布田川断層帯は「一続きの断層帯とみるべきだ」と語る	5. 2 (月)	日経 (朝刊)
50 備える3.11から第127回住宅の耐震化 護 雅史減災連携研究センター特任教授が熊本地震の調査結果をふまえ「耐震性があっても決して安心できない」と語る	5. 2 (月)	中日 (朝刊)
51 大村秀章愛知県知事は海外から日本に患者を呼び込む医療ツーリズムの推進に乗り出し「あいち医療ツーリズム研究会」を発足させ、本学など医学部のある四大学などが参加予定	5. 2 (月)	中日 (朝刊)
52 福和伸夫減災連携研究センター教授は熊本地震で人吉市の庁舎が破壊したことについて「学校などの公共施設に比べて、役所の安全は後回しでよいという社会的風潮が庁舎の耐震化や建て替えを遅らせた一因だ」と語る	5. 2 (月)	毎日 (夕刊)
53 阿部まゆみ医学系研究科特任准教授が開催する緩和ケア「ライフトピアサロン」が取り上げられる	5. 3 (火)	中日 (朝刊)
54 第69回中日文化賞: 森 郁恵理学研究科教授 神経回路の情報処理機構に関する研究	5. 3 (火)	中日 (朝刊)
55 本 秀紀法学研究科教授は「政権は国旗、国歌で『大学の考え方はこうあるべきだ』とやり始めた。次は『何を教えるか』『誰か教えるか』までコントロールされる恐れがある」と語る	5. 3 (火)	中日 (朝刊)
56 医学部附属病院などの研究で肺がん患者のうち、気腫合併肺線維症を伴う患者は肺がん手術後の死亡率が、肺がんのみの患者に比べ3倍高いことが分かった	5. 7 (土)	中日 (朝刊)
57 本学と中部大学のチームがホタルの発光のもとになる物質「ルシフェリン」が2種類の化学物質を水の中で混ぜるだけで簡単に合成できることを発見した	5. 7 (土)	中日 (朝刊) 他2社
58 森 重文本学特別教授は数学を好きになるためにはという問いに対し、「ぼーっとする時間を持つこと」と解答	5. 7 (土)	中日 (夕刊)
59 名古屋市と名古屋都市センターは耐震対策を考える緊急のシンポジウムを15日に開き福和伸夫減災連携研究センター教授が講演する	5. 7 (土) 5.10 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
60 紙つぶて: 五月の心得 四方義啓本学名誉教授	5. 7 (土)	中日 (夕刊)
61 子連れ赴任 相談しあう場 上川内あづさ理学研究科教授と田川美穂未来材料・システム研究所准教授が「名古屋大学子育て单身赴任教育ネットワーク」を結成し、鳴瀧彩絵工学研究科准教授はこのネットワークのおかげで「着任前に生活をシミュレーションできた」と語る	5. 9 (月)	毎日 (朝刊)
62 キラリ研究開発: 第192回モノづくりと未来のエネルギー 名古屋大学プズマ科学プラットフォーム (1) 大野哲靖工学研究科教授は「『プラズマは固体・液体・気体に続く物質の第4の状態』と言われている」と語る	5. 9 (月)	日刊工業
63 ひゅ〜まん愛知: 共に生きる社会をつくる NPO 法人「名古屋難民支援室」コーディネーター羽田真帆氏本学大学院修了	5. 9 (月)	読売

記事	月日	新聞等名
64 就カツッ! :博士専門の相談窓口 面談やインターン紹介 ビジネス人材育成センター「B-jin」が取り上げられ森 典華 学術研究・産学官連携推進本部主幹リサーチ・アドミニストレーターがアドバイスする様子が紹介される	5.10 (火)	中日 (朝刊)
65 震度7 連鎖の衝撃2 ここにも活断層が 鈴木康弘減災連携研究センター教授は熊本地震の本震を起こした布田川断層帯が従来の想定より北東に長く伸びていたことについて「もっと丁寧な説明が必要だった」と語る	5.11 (水)	日経 (朝刊)
66 市川 彰文学研究科特任助教らのグループは、古代マヤ文化圏と非マヤ文化圏との交流の鍵を握る石造大基壇を発見	5.12 (木)	中日 (朝刊) 他2社
67 のよりサロン:「文化を尊ぶ文明」科学にはつなぐ力ある 野依良治本学特別教授が本学学生と議論を交わす	5.12 (木)	中日 (朝刊)
68 東海3県 活断層集中 高いリスク 鈴木康弘減災連携研究センター教授は「活断層がもたらす震度7級の揺れのすさまじさを改めて思い知った」と語る	5.12 (木)	読売
69 小田裕昭生命農学研究科准教授らの研究グループがインターネットで身長や体重、健康診断結果を打ち込むと一日の食事で取るべき栄養素の基準量が自動表示されるシステムを開発し公開した	5.13 (金)	中日 (朝刊)
70 熊本地震1ヶ月:山岡耕春環境学研究科教授は南海トラフ巨大地震への影響について「距離が離れており、一足飛びに起きることはないだろう」と語る	5.13 (金)	読売
71 高校将棋愛知県大会:男子B組1位 武藤颯佑さん教育学部附属高等学校生	5.13 (金)	中日 (朝刊)
72 益川敏英本学特別教授が本学で科学と平和をテーマに講演	5.13 (金)	中日 (朝刊)
73 ミッドランド毎日フォーラム 第100回記念定例会開催:12日 丹羽宇一郎本学名誉博士が講演し「サミットに中国とロシアを入れなければ、物事を進められない」と語る	5.13 (金)	毎日 (朝刊)
74 私の駆け出し時代⑩:オークマ株式会社社長花木義彦氏本学卒業生 3年目で挑戦した検査装置の開発	5.13 (金)	中部経済
75 菱川明栄物質科学国際研究センター教授らのグループは強レーザー光を照射し「電子の集団」を電子顕微鏡で捉えることに成功	5.14 (土)	中日 (朝刊)
76 活断層の位置 把握し対策を 鈴木康弘減災連携研究センター教授	5.14 (土)	中日 (朝刊)
77 「震災と無縁の過信」福和伸夫減災連携研究センター教授は「地震が最近起きていないところは、逆に発生が近づいているという発想で、地域主体の防災対策を急ぐべきだ」と語る	5.14 (土)	読売
78 紙つぶて:稲作の光景 四方義啓本学名誉教授	5.14 (土)	中日 (夕刊)
79 シンポジウム「熊本地震が警告する南海トラフ巨大地震対策の盲点」開催:14日 福和伸夫減災連携研究センター教授は「熊本地震で知り得た事を、研究に生かしたい」と語る	5.15 (日)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
80 愛知県精神障害者家族会連合会創立50周年記念式典開催:14日 尾崎紀夫医学系研究科教授が記念講演を行った	5.15 (日)	毎日 (朝刊)

INFORMATION

平成28年度名古屋大学公開講座

■全学企画

テ ー マ:「個と集団-ネットワークの様々な様相」

開催日時:平成28年8月30日(火)～10月27日(木)の火・木曜日の全15回
午後6時～午後7時30分

会 場:IB 電子情報館 IB015講義室および ES 総合館 ES ホール (予定)

募集定員:200名

応募資格:満18歳以上の方

受 講 料:9,460円

申込期間:平成28年6月20日(月)～7月22日(金)を予定

申込・問い合わせ先:研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL:052-747-6584

(詳細につきましては、社会連携課までお問い合わせください。)

■ラジオ公開講座

テ ー マ:「個と集団-ネットワークの様々な様相」

開催期間:平成28年7月3日(日)～9月4日(日) 毎週日曜日午前11時～午前11時30分

放 送 局:東海ラジオ放送 (1332KHz)

問い合わせ先:研究協力部社会連携課「公開講座」係 TEL:052-747-6584

■部局企画

日程	講座名等〔主催者〕	会場	定員	受講料	問い合わせ先
7/23(土) 13:00~16:00	第15回 Jr. サイエンス教室 〔遺伝子実験施設〕	理学部 G 館 1 階生物実習室 (113号室)	20名	無料	Jr. サイエンス教室担当係 E-mail : jr-sci@gene.nagoya-u.ac.jp
7/30(土) 13:00~16:00 (予定)	宇宙地球環境研究所 公開講演会 〔宇宙地球環境研究所〕	理学南館大講堂 (坂田・平田ホール)	200名 (事前申し込み不要)	無料	研究所事務部総務課総務第二係 TEL : 052-747-6303
8/1(月)~8/2(火)を予定 13:00~15:00 (予定)	心の発達支援研究実践センター・ 公開レクチャー 〔心の発達支援研究実践センター〕	教育学部	30名程度	無料	心の発達支援研究実践センター E-mail : e43195b@cc.nagoya-u.ac.jp
夏 (アゴラ) 8/2(火)~8/4(木) 総合演習日 8/22(月) 秋 (公開講座) 10/15(土)、10/22(土)、 10/29(土) 講座別発表 11/19(土) 9 : 30~16 : 30	2016年度数学アゴラ夏季集中および 秋季公開講座 〔愛知県教育委員会、 名古屋市教育委員会、 岐阜県教育委員会、 三重県教育委員会、 日本数学会〕	多元数理科学棟509号室	約100名	無料	愛知県立高校以外の人： 多元数理科学研究所 教育研究支援室数学アゴラ係 TEL : 052-789-5742 愛知県立高校の生徒： 愛知県「知の探究講座」 TEL : 052-954-6786
8/2(火)~8/4(木) 9:00~17:00 (詳細未定)	第25回公開セミナー 「天文学の最前線」 〔理学研究科、名古屋市科学館〕	理学南館大講堂 (坂田・平田ホール)、 野依記念学術交流館、 名古屋市科学館	300名	1,000円 (一般) 500円 (高校生) ただし テキスト代として	理学研究科素粒子宇宙物理学専攻宇宙論研究室 E-mail : ichiki.kiyotomo@c.mbox.nagoya-u.ac.jp
8/6(土)~8/7(日) (2日間同一コースを受講) 10:00~16:00	公開実験講座2016 「バイオサイエンス・バイオテクノロジー を体験する」 〔生物機能開発利用研究センター〕	生物機能開発利用研究センター の各研究室	15名	2,500円	生物機能開発利用研究センター事務局 TEL : 052-789-5194 又は TEL : 052-789-5838
8/7(日) 15:00~17:00 (予定)	乳幼児期の発達障害の 包括的アセスメントと支援 〔心の発達支援研究実践センター・発達 障害分野における治療教育的支援事業〕	教育学部大講義室	100名	無料	TEL : 052-789-2611
9/3(土)、9/10(土)、 9/24(土) (3回) 14:00~16:00	柔道寝技教室 〔総合保健体育科学センター、 名古屋大学柔道部〕	第4 体育館	30名程度	無料	瓜谷章 (柔道部部长、工学研究科教授) TEL : 052-789-3797
9/18(日) 13:00~17:00 (予定)	子どものレジリエンスを新生児期の 支援から考える 〔心の発達支援研究実践センター〕	野依記念学術交流館	120名	無料	TEL : 052-789-2658
9/24(土) 9:30~17:00 (予定)	音声言語の処理と分析 〔国際開発研究科〕	国際開発研究科棟	20名	無料	文系総務課総務グループ TEL : 052-789-4952
未定	先端技術公開セミナー 〔情報科学研究科〕	未定	100名程度 (予定) (事前申し込み不要)	無料	情報科学研究科広報渉外委員会 担当 庶務係 TEL : 052-789-4716
未定	基盤研究公開セミナー 〔情報科学研究科〕	未定	100名程度 (予定) (事前申し込み不要)	無料	情報科学研究科広報渉外委員会 担当 庶務係 TEL : 052-789-4716
計4回 10/6(木)、10/13(木)、 10/20(木)、10/27(木) (予定) 午後6時30分から 1時間半程度	人びとの「幸福」をめざした開発： ブータンの事例を中心に 〔主催：国際開発研究科 共催：国際開発学会東海支部〕	国際開発研究科棟 8階オーデトリウム	80名	無料	文系総務課総務グループ TEL : 052-789-4952
11月中旬を予定 13:30~16:15 (予定)	平成28年度鶴舞公開講座 〔医学部医学科、医学部附属病院、 名古屋大学医師会 (予定)〕	中央診療棟3階講堂	200名	無料	医学部・医学系研究科総務課総務係 TEL : 052-744-2040 FAX : 052-744-2785 e-mail : iga-sous@adm.nagoya-u.ac.jp
12/11(日) 9:00~17:00 (予定)	WISC IVの理論と実践 〔心の発達支援研究実践センター・発達 障害分野における治療教育的支援事業〕	未定	50名	無料	TEL : 052-789-2611
12月第2週を予定 13:00~17:00	第16回公開セミナー 〔遺伝子実験施設〕	理学南館大講堂 (坂田・平田ホール)	参加自由	無料	施設事務局 E-mail : jimu@gene.nagoya-u.ac.jp

*各公開講座については、名古屋大学 HP > 社会との連携/国際交流 > 公開講座/一般向け受講案内に最新情報を掲載しています。

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

4月19日(火)～8月27日(土)

場 所：博物館 2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日、8月13日～16日

入 場 料：無料

第22回博物館特別展

「モンゴル大百科－ Mongolian Natural History －」

[関連特別講演会]

場 所：博物館 3階講義室

時 間：13:00～14:30

講演題目：「モンゴルの環境汚染」(7/9)

講 演 者：山本鋼志 (環境学研究科教授)

講演題目：「太古の生物大進化」、「モンゴルの地質と鉱床」(8/6)

講 演 者：大路樹生 (博物館教授)、苗村康輔 (同特任助教)

参 加 費：無料



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

4月25日(月)～7月29日(金)

場 所：博物館野外観察園

セミナーハウス 2階

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日

入 場 料：無料

博物館野外観察園セミナーハウスサテライト展示

「名大の蛾 II. 春～夏の蛾」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767



5月18日(水)～7月9日(土)

場 所：減災館

時 間：13:00～16:00

休 館 日：日・月・祝日、第2・4火曜日

入 場 料：無料

減災館第15回特別企画展「平成28年熊本地震」

内 容：熊本地震の災害対応・復旧復興の一助となるよう減災連携研究センターが地震発生直後からすすめている調査研究から把握される熊本地震の特徴や被害の特徴などを速報として紹介

[問い合わせ先]

減災連携研究センター 052-789-3468



6月2日(木)～17日(金)

場 所：経済学図書室・EU情報センター
(法経共用館 1階)

時 間：9:00～17:00

休 館 日：土・日曜

入 場 料：無料

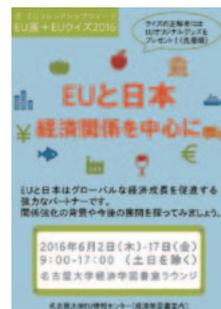
EU展+ EU クイズ2016

「EUと日本：経済関係を中心に」

内 容：ポスター展示、EU資料の無料配布、
EUクイズ (正解者には先着順でEUグッズを進呈)

[問い合わせ先]

文系事務部総務課
図書グループ (経済) 052-789-4922



6月10日(金)～9月30日(金)

場 所：附属図書館医学部分館
2階入口ホール

時 間：9:00～20:00 (平日)
(8/8～9/30は9:00～17:00)、
13:00～17:00 (土曜日)

休 館 日：日・祝日、

8月13日～9月24日の土曜日、

8月15日、16日、25日～31日

入 場 料：無料

附属図書館医学部分館ミニ展示会

「戦争と大学 ふたたびー軍医と銃後ー」

内 容：1931年の満州事変以降、戦争が拡大していくにつれて軍医として召集される医師が増え帝国大学等に臨時附属医学専門部が設置された。銃後 (直接戦闘に加わっていない一般国民) も、何らかの形で戦争に参加していくことになった時代の軍医と銃後に関する史料を展示公開する



[問い合わせ先]

附属図書館医学部分館 052-744-2505

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

6月17日(金)

場 所：全学教育北棟4階
多目的講義室(406室)
時 間：17:30~19:00
参 加 費：無料

第50回日本語教育学講座講演会

講演題目：「シンタクスの中的話者と聞き手」
講 演 者：宮川 繁氏(マサチューセッツ工科大学教授)



[問い合わせ先]

国際言語文化研究科 教授 玉岡賀津雄
ktamaoka@lang.nagoya-u.ac.jp

6月22日(水)

場 所：野依記念物質科学研究館2階
野依記念講演室
時 間：13:00~
対 象：一般

統合物質創製化学研究推進機構
開所式、及び記念講演会

講演題目：「時代に生きる物質化学研究機構」
講 演 者：野依良治(本学特別教授)
講演題目：「世界を照らすLED」
講 演 者：天野 浩(未来材料・システム研究所教授)
講演題目：「Frustrated Lewis Pairs: Organometallic Chemistry Without Metals? (新しい触媒概念の創出)」
講 演 者：Gerhard Erker氏(ミュンスター大学教授)
講演題目：「合成化学のチカラ：分子で答えを出す」
講 演 者：伊丹健一郎(トランスフォーメティブ生命分子研究所教授)
内 容：機構長挨拶、総長挨拶、来賓祝辞、記念講演、
パネルディスカッション、他



[問い合わせ先]

物質科学国際研究センター事務室
052-789-5907

6月23日(木)

場 所：野依記念物質科学研究館2階
野依記念講演室
時 間：9:30~15:50
対 象：一般

統合物質創製化学研究推進機構 キックオフシンポジウム

[問い合わせ先]

物質科学国際研究センター事務室
052-789-5907

6月28日(火)

場 所：情報基盤センター4階演習室
時 間：13:00~14:30
定 員：40名
対 象：一般
参 加 費：無料

平成28年度第3回情報連携統括本部公開講演会・研究会

講演題目：「情報セキュリティの動向と対策」
講 演 者：佐藤俊介氏(岐阜大学技術専門員)
内 容：情報技術の最新動向について

[問い合わせ先]

情報推進部情報推進課 052-789-4368

7月9日(土)、8月20日(土)

場 所：博物館2階実験室、展示室
時 間：10:00~15:30
定 員：21名
対 象：小学5年生以上、一般
参 加 費：500円(保険料)

ミクロの探検隊®

「名古屋大学のムシを電子顕微鏡で観察しよう！」

テ ー マ：「観察園のムシ」(7/9)、「雑木林のムシ」(8/20)
内 容：本学構内で各自ムシを採集し、実体顕微鏡、走査型電子顕微鏡
を使用し微細構造の観察をしながら分類や働きを学ぶ



[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

開催月日・場所・問い合わせ先等

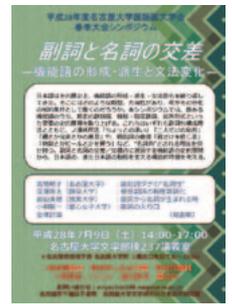
内容

7月9日(土)

場 所：文学部 2階237講義室
時 間：14:00～17:00
対 象：一般
参 加 費：無料

平成28年度文学研究科国語国文学会
春季大会シンポジウム「副詞と名詞の交差
—機能語の形成・派生と文法変化—」

講演題目：「副助詞ダケの『名詞性』」
講 演 者：宮地朝子（文学研究科准教授）
講演題目：「様態副詞の程度副詞化—名詞的用法の位置—」
講 演 者：深津周太氏（静岡大学講師）
講演題目：「副詞から名詞が生まれる時—並列形式の変化—」
講 演 者：岩田美穂氏（就実大学講師）
講演題目：「副詞の入り口」
講 演 者：小柳智一氏（聖心女子大学教授）
内 容：数ある機能語のうち、限定の副助詞、様態・程度副詞、
並列形式といった要素の史的展開を取り上げる



[問い合わせ先]
文学研究科日本語学研究室
miyachia@lit.nagoya-u.ac.jp

7月29日(金)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：13:30～18:00
定 員：200名（予定）
対 象：国際開発研究科修了生、
関係教員、一般
参 加 費：無料

国際開発研究科創設25周年記念国際シンポジウム
「新時代の国際開発研究と教育：持続可能な開発目標とその先」
International Symposium on "A New Era of Development
Research and Teaching : The SDGs and Beyond"

講演題目：「新時代の国際開発研究と教育：持続可能な開発目標とその先」
講 演 者：デイビッド・ヒューム氏
（マンチェスター大学グローバル開発研究所長・英国国際開発学会会長）
内 容：世界の国際開発学を牽引するイギリスの国際開発学会長による国際開発学
の現状と今後の展開についての基調講演、世界各国で活躍する本研究科の
修了生を中心として、持続可能な開発のための包含的経済成長や平和と
包含的な社会の促進についてのラウンドテーブルディスカッション
（使用言語は英語）

[問い合わせ先]
文系事務部総務課（国際開発）
052-789-4952

表紙サークル紹介



表紙
練習風景（日本拳法部）
（平成28年5月14日）

日本拳法部

日本拳法は日本初の総合格闘技であり、自衛隊においても徒手格闘として採用されています。その戦いの幅は広く、パンチやキックといった立ち技はもちろんのこと、投げ技に関節技といったあらゆる技を練習し習得することが出来るので、自分に合ったスタイルで強くなる事が出来ます。作戦の幅も広いので、戦う時の相手との駆け引きも重要になってきます。また、全身に面や胴をつけ、グローブをはめて戦うので、攻撃が当たってもケガをしにくいのが長所のスポーツです。日本拳法の選手の大半が大学から始めた人であり、他の大学のライバルたちと同じスタートラインに立ち、ともに強くなる事が出来ます。誰でも歓迎です。

名大トピックス No.277 平成28年6月15日発行

編集・発行／名古屋大学総務部広報渉外課

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報渉外課にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601） TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@adm.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ（<http://www.nagoya-u.ac.jp/about-nu/public-relations/publication/index.html>）でもご覧いただけます。

170 名大の公文書史料 — 過去に学び、未来への責任を果たす —

名大の公文書は、名大の組織としての歴史を明らかにできる最も確実な資料です。名大において、歴史資料としての公文書を保存・公開する唯一の施設が大学文書資料室(以下、資料室)です。

もっとも、資料室が公文書史料の保存施設として公式に位置づけられたのは2004(平成16)年です。その前においては、重要な史料にもかかわらず、業務に使わないという理由で廃棄された公文書もあったことでしょう。

意識的に廃棄しなくても、災害によって失われた公文書もあります。代表的な例は第二次世界大戦末期の空襲で、医学部(鶴舞キャンパス)や旧教養部の前身にあたる第八高等学校(現名市大滝子キャンパス)は校舎がほぼ全焼し、主要な公文書が焼失したと考えられています。

空襲を逃れた公文書群もあります。経済学部の前身に当たる名古屋高等商業学校(現名市大桜山キャンパス)は、八高のすぐ近くにありましたが空襲の被害は軽微で、その

公文書が多く残り、資料室で歴史資料として保存・公開されています。

もちろん資料室では、戦後の名大の公文書も保存・公開しています。その中には、評議会や学部長会、各部局の教授会など、きわめて重要な会議の議事録も含まれています。

そして公文書は、いわゆる古文書等と異なり、将来的に歴史資料となるであろうものが今この瞬間にも作成され続けているという特徴があります。とりわけ名大は、日本の基幹的综合大学として、より多くの公文書史料を残すことによって、果すべき未来の社会や人々に対する説明責任を有しています。

そのため名大では、公文書管理法に基づき、新しく生み出された公文書が歴史的に重要かどうかを判断し、業務に使わなくなったら資料室に移管するシステムを構築し、運用しています。



1	2	3
4	5	

- 1 名古屋高等商業学校(1920-1951)の公文書。経済学部で保存されてきた約900点が2010年度に資料室へ移管された。学術的にも一級史料といえる。
- 2 大学文書資料室の公文書史料書庫。酸化を防ぐため、中性紙製文書箱等に入れて保存している。
- 3 昭和40年代の評議会議事録。評議会や教授会などの重要な会議の記録は、作成後30年が経過すると大学文書資料室に移管される。
- 4 大学文書資料室(本部5号館)。公文書管理法に基づく、国立公文書館に準ずる施設として内閣総理大臣から指定を受けている。この指定施設を持っている国立大学は、全国で10大学のみ。
- 5 大学文書資料室のオンライン資料検索システムの検索条件入力画面。公文書史料は、「特定歴史公文書等」に含まれ、現在約9千点を一般公開している(利用には公開制限に関する審査が必要)。